批評

雜誌五十五號を讀む

溪川生

四月四日、覇家臺の旗亭に、慰勞と、祝勝との大酒筵に侍りて、酒泉君となりしより二日目の夜、雲を踏んで英彦山に登る。旅館の燈幽かなるに、夜半風出でゝ、夢もまた噪ぎ、旅魂悠々として恨止めがたく、行李を探りて、雜誌五十五號を讀む。思ふに、悉く是金玉の文字、淺才吾人の如きもの、兎角の議を挿むは、嗚呼がましけれど、人もすなるものをと一度思へば、例の心むら〳〵と立ち登りて、留めがたく。思ふ事を書き付く。

開卷、先づ頓首して『答客問』を讀む、諄々として父母の温言に接するが如し、吾人愚と雖、尚茅塞を開いて、かの明月を望むの思ひあり。

澁江君の解剖學に於ける、吾人の如き門外漢も尚是を聞く。其道の人を待たずんば吾人いかでか月且し得べき。

雜錄、かりすまひの記は埋木窠先生の文にして、埋木窠は稼堂先生の別號なりと聞く、滔々數千言、縱横無碍に述べ盡さるゝ、身自ら其處に居て、先生の例の快辯に侍べるが如し。

人には『朽ちたる木のはしのやうに』思はるれど、『いつか蒲輪もて』とほのめかさるゝを見れば、尚機心忘れさせ給はぬにもや、と見ゆるに、『ひとり無何有の鄕に遊びて、木の葉降る夜は、月を窓より招き、嵐ふる日は、時雨を軒よりさそひ』、四季折々の景によりて、悉くかの世上の人を忘れ、圖書万卷の裡に隱れさせ給ひて、坐右の銘には、常住不斷とせさせ給へる、是やがて吾人坐右の銘とすべきものにあらずや。

蝶二愁郎君の筆に成れる雜筆二篇、悉く悲哀の大文字、吾人今異鄕にありて、此文を讀む、感慨更に深し。吾人は更に願ふ所は、君が樓名こそゆゑしけれ、紅雨點々の恨、先腸幾斷、君が才筆によりて物語られん事是なり。

『屋嶋』は才華燦爛、殊に『皎々たる滿月も』の一節の如き、『悲い哉、一天萬乘の君』の一節の如き、吾人をして幾度か打ち誦さしめぞ。風神奕々、恰も大平記を讀むの思あり。

されど、私かに思ふ、此二篇ハ、或は君が平生の作に比して遜色あることなきやと。(固より雜筆なれば文字にあまり力めさせ給はぬにもあめれど、慥に美文として記されたるを見受くれば)。冒頭『花の都さへ』より『二日ばかりの事なりし』にまでは、餘り文字を惜氣もなく使ひて、さかも句調異樣に思はれて、耳障りとなるの感はなきや。

又月に歩みて、『何處と定め』もせず、行くとはなしに立ち出でつるものを。狹斜の巷に向はせつるとは、さかも艶郎の足しげくとまで、書かせられたるは、余り筆を弄びて、無くもがなと思はる。

又『記臆の囊中にあるほどの詩歌を讀みつくして』後、千里が歌を絞り得たりしとは余り巧みたる次第ならずや。

安宅の關、衣川の水、水とは聞えず、義經が水攻にでも、遇ひたるやうなり、いかにや。

『水烟』又餘り筆を用ゐ盡して、反て生硬の氣味あるやう覺ゆ、喃喃と計り幾つも續くるは聞き惡くし、叫喚の境なればと云はゞ、詮もなけれど、餘りと云へば餘りなり。且姉の云へる詞の下半は、煩はしきに過ぐるやうなり。又『れも父』などゝ古さびたる詞の一つ離れて見ゆるも、目障りならずや、

吾人嘗て私に思へらく、悲哀の文字は殊更に簡潔ならざるべからず、然らずんば、綿々として痴婦の怨言に似て煩はしく、反て滑稽じみて腹をかゝゆ、されど、是難中の難、當今の所謂文家といふもの、己に悉く此病にかゝれるを、吾人今取り出でゝ、事々しく君に難する其罪過少からずと雖、君とは爾汝の交あるが上に、學を同うして共に天下の文壇に立たんとするものなれば、只所思を陳べて、互に

切瑳攻修せんとするのみ、尙此處に吾人が私かに坐右の箴とする、一至言あれば、併せて君の是正を仰がん、

いつの頃なりけん、鄉國に肥遁したる維新の古壯士某翁を訪ひて、談論漸く進み、翁は切りに當年の先進を論判して、後更に言を改めて謂て曰く、聞けよ、吾子、人は多く其得意のものによりて成り、而して又得意のものによりて敗ると、作文の上に於ても亦此の如きろ。蝶二君足下、幸に吾人の微衷を納れさせ給ふや、否や。

觀風遊記は久しく芳名を聞ける東籬園君の筆なり、親切叮寧に記して、文章亦雄健にして唱すべきもの多し、

韓文公は杏城君の筆なり、入れ違へられたれば、次號に讓る、敎を乞はんも其時にとて。笛のやすさびとは、如何なる人の雅號ならん、優に書きなされたり、吾人未だ不知火を知らず、君の文によりて、一遊を思ふ事切りなり。

文苑の欄に移れば、湖月君の新体詩あり、題して深山春といふ、詞頗美しけれど餘情少きやうにはあらずや。

哲人君は、漢文學の專攻なりと聞くに、優しきすさみもせらるゝ事かな、鶯の初音待ちえての句の如き、絕唱といふべし。

蘆月君の歌、孰れも無難の作とや云はまし。

江楠君の都春月の長閑さを柳に求めての歌は哲人君の鶯の歌と共に本號歌集中の大關なるべし。同君の待花の歌の五句の、待つと云ふ題の心より、折角、嘆かなん、と云はれたる、さらでもと思はる、いかに。

やまひと君の最後の、たらちねの歌、誠意溢れてゆかし。

淙川の五首を評せよと云ふは、村會議員の補欠選擧に、自分自身を投票せよといふが如し。

吾人俳句を知らず。只秋骨君の春戸口の一句、讀終て尚心にあり。

潤蓮孫、已に第七に至る、天下知名の玉什、嘴を容るべくもあらず。

鴎君の詩情は羨むべきかな、軟日軟風吹麥芽の一絶句は、此詩集中の白眉か。

詩作の經驗なきものは、徒に詩句を語るべからず、若し過たば、何の辭を以て作者に謝すべき。

松露君、矯然たる筆力を以て細論せらる。苦心のものは、苦心を以て見ざるべからず、一夜漬にては到底善羞に上すべきにあらずされば。

雅報九件、讀んで會盟の選手に至る、當時を思へば、吾人實に衷心憂ふべきものなくんばあらざりき、而して一たび及を交ふるに及んで、劍光の閃く處、人馬悉く仆れ、生還者僅かに二人、大々勝利を得て我五高の名を去て、天下に重きを置かゝめたる、實に諸君にあらずして誰ぞ、聊か此に記去て諸君の功名を讃美す。

筆を擱いて讀一過すれば、是非を誤り、正邪を混し、妄言罪深くして、容易に遊るべくもあらず、只諸兄の寛大を仰ぐのみ。

更已に深けて、風やうやく己みつれど、山上には、尚颯々の聲ありて、時に鳴鷄を聞く。

雜報

◎就任の詞

こたび、生等謬りて諸君の推薦に依り、乏去きを編輯員に受く、晨夜この身の不敏を思ひて、憂慮措くこと能はざるなり。然りと雖、既にこの任に當れり、今は只諸君と共に鞠躬盡力し、我龍南會本來の主義方針に遵ひ、以て益龍南健兒の眞面目を發揚し、煥發し、聊天下の風敎に益する處あらんことを期す。任に就き、卷を新むるに當り、微衷を記して就任の詞となす。